第四章　薫の物語　薫、出生の秘密を知る

［第一段　十月初旬、薫宇治へ赴く］

　十月になりて、五、六日のほどに、宇治へ参うでたまふ（十月になって五日から六日にかけて薫中将は宇治の八宮邸に参上なさいます）。　＊注に＜十月は初冬である。しかし、実際の冬は立冬の日からである。薫は晩秋に宇治を訪問して以来の宇治行き。＞とある。この注がどうして立冬にこだわるのか、その理由は私には分からない。冬の話題ということで良いんじゃないのかな、別に。それに、この薫中将の宇治通いが、当初は八宮の隠遁生活に隠者の心境を学びたいという薫君の厭世観からはじまったもの、という設定というか仕掛けだったが、その薫君の厭世観の大元であるらしい自分が不義の子ではないかという疑義について、その実情を知っていそうな人物が、何とこの宇治山荘に老女房として仕えていた、という展開を見るに至っての、その実情の一端でも知る事が出来そうだ、というように訪問意義が変わっての、その新局面での再訪なのであり、興味深い姫君たちの登場を見て、その絡みも期待されるものの、ご丁寧に、薫君自身はその恋にのめり込む心境に無い、という断りが上文に示される、という中で、いよいよ話が動き出す場面、かと思う。

　「網代をこそ、このころは御覧ぜめ（網代漁が今は見所です）」と、聞こゆる人びとあれど（と中将に申し上げる供人がいたが）、

　「何か（どうして）、その＊蜉蝣に争ふ心にて（そんなヒヲムシでもないのに）、網代にも寄らむ（ヒヲを誘う網代などに近付くものか）」　＊「蜉蝣」は、音読みなら＜ふいう・ふゆう＞で、訓読みなら＜かげろふ、トンボの古名＞と読むのが普通らしいが、此処では「ひをむし」と読みがある。「ひをむし」は＜朝に生まれ夕には死ぬという虫。カゲロウの類。また、はかないもののたとえ。＞と大辞泉にある。「ヒヲムシにあらそふ心」は、渋谷訳文に＜蜉蝣とはかなさを争うような身＞とあり、出生の秘密の鍵を握る人物に会いに行く、という意味では、薫君が自分をはかない存在と感じ、自殺願望も有るかの心理状態からすれば、明日をも知れぬ命と見つめているのかも知れず、その含みで語意を探って文意を拾えばそうした読み方も有り得るような気もするが、それは即ち薫君の内心での暗意であり、その暗意を持たせるためにこんな変な言い回しをしたようにも思うが、是は発言文なのだから表意は客観的に通じる意味で読むべきなのだろう。で、此処はそれこそ逐語訳に努めれば＜ヒヲムシに反感する気持→ヒヲムシじゃあるまいし＞という言い方に見えるし、網代は氷魚（ひを、アユの稚魚）を獲る仕掛けなので、「ヒヲ」に洒落るというオヤジギャグで＜ヒヲムシじゃないからヒヲ狙いの網代は避ける＞と言ったもの、と読んで置く。「～じゃあるまいし」と＜～＞を対比させる言い方をする場合、その多くは、部分的にか本質的にかはともかく、発言者が＜～＞を対象体と類似性があるものとして認識していることを示していて、「～に争ふ心にて」という言い回し自体は当時は然程変わった言い方でもなかったのかも知れない気もするが、ヒヲムシとヒヲを掛けるのは当時でも一般的じゃなかったんじゃないかな。ただ、氷魚といえば蜉蝣という語呂合わせが馴染んでいないと、この中将の台詞があまりにもワザとらしいので、私が氷魚や蜉蝣に縁が無いだけで、宇治などの氷魚に馴染みのある場所柄や縁のある人びとの間では普通に通じる洒落だったのかも知れない。

　と（と薫中将は）、そぎ捨てたまひて（網代見物を省きなさって）、例の（いつものように）、いと忍びやかにて出で立ちたまふ（ごく小人数でお出掛けなさいます）。＊軽らかに網代車にて（簡素な網代車で）、＊かとりの直衣指貫縫はせて（固織布の直衣指貫を仕立てさせて）、＊ことさらび着たまへり（事改まった装束を着ていらっしゃいました）。　＊「軽らかに網代車にて」というのはどういう意味か良く分からない。「網代車（あじろぐるま）」は屋根から側面までが一体化した幌馬車みたいな曲線形状の牛車らし

いが、大辞林には＜牛車(ぎつしや)の一。竹または檜(ひのき)の薄板の網代で屋形をおおい、物見（窓）を設けたもの。摂政・関白・大臣・納言(なごん)・大将などは略式用として、四・五位、中・少将、侍従などは常用とした。＞と説明があり、中将の普通の車だったらしく、特に「軽らかに」というのは、装飾紋様が地味だったり簡素だったのだろう、と取って置く。　*「かとり」は＜《「かたお(固織)り」の音変化》目を緻密(ちみつ)に固く織った平織りの絹布。かとりぎぬ。＞と大辞泉にある。緻密な織物ということは手の込んだ上質品だろうか。　*「ことさらぶ」は＜わざとらしい。ことさらめく。多くは悪い意味で使う。＞と大辞林にある。が、薫君にしてみれば一生を左右しかねない重大な話が聞けるかも知れないわけなので、威儀を正す心意気ではあったのかも知れず、此処では特に「悪い意味」での語用でもないように見える。ただ、語り手の意図が分かり難い文ではあり、未消化感は残る。

宮、待ち喜びたまひて(八宮は歓待なさって)、所につけたる御饗応など(宇治の特産品でのご馳走などを)、をかしうしなしたまふ(風情豊かに饗応なさいます)。暮れぬれば、大殿油近くて(夜になると部屋明かりを灯して)、さきざき見さしたまへる文どもの深きなど(以前から読み掛けていらした経文類の深い意味などを)、阿闍梨も請じおろして(阿闍梨も招聘して)、義など言はせたまふ(講義させなさいます)。

うちもまどろまず(少しもまどろまず)、川風のいと荒らましきに(川風がたいそう荒々しく吹いて)、木の葉の散りかふ音、水の響きなど、あはれも過ぎて(木の葉が散り交じる音や水しぶきの音が風情どころか)、もの恐ろしく心細き所のさまなり(もの恐ろしくて心細いほどでした)。

明け方近くなりぬらむと思ふほどに(明け方近くになろうかという時に)、ありし*しののめ思ひ出でられて(先日の思わせぶりな朝の様子が思い出されて)、琴の音のあはれなることのついで作り出でて(琴の音が風情があるという話題を持ち出して)、　*「しののめ」は、「篠の芽」で＜内に籠もっている意の例え。＞と古語辞典にあり、また「篠の目」で＜薄明かり→あけぼの＞となり、曙の夜明けには東の空が白むことから「東雲」と当てられた、みたいな説明が大辞林にある。要するに掛詞の洒落語用らしい。

「さきのたびの、霧に惑はされはべりし曙に(前回の霧が深かった日の朝に)、いとめづらしき物の音、一声承りし残りなむ(とても珍しい演奏を一部お聞き申しました心残りが)、なかなかにいといぶかしう(いつまでも気になって)、飽かず思うたまへらるる(物足りなく存じられます)」など聞こえたまふ(などと薫中将は申しなさいます)。

「色をも香をも思ひ捨ててし後(世俗の色香も捨て去った今は)、昔聞きしことも皆忘れてなむ(昔覚えた弾き方も皆忘れてしまいました)」

とのたまへど(と八宮は仰るが)、人召して、琴取り寄せて(人に琴を持って来させなさり)、

「いとつきなくなりにたりや(何ともとっつき難くなってしまいました)。しるべする物の音につけてなむ(お手本の後に尾いてだったら)、思ひ出でらるべかりける(思い出せるかもしれません)」

とて、琵琶召して(と言って宮は琵琶を用意させて)、客人にそそのかしたまふ(客人の中将君に勧めなさいます)。取りて調べたまふ(薫中将は琵琶を手に取って調弦なさいます)。

「さらに(無理ですね)、ほのかに聞きはべりし同じものとも思うたまへられざりけり(是は先日ほのかにお聞き申しましたものとは同じ楽器とは思えません)。御琴の響きからにやとこそ(姫君がお弾きになったから素晴らしい音だったのかと)、思うたまへしか(存じられます)」

とて、心解けても掻きたてたまはず(といって薫君は気軽にはお弾きになりません)。

「いで、あな、*さがなや(いや何と意地悪な、仰りようか)。しか御耳とまるばかりの手などは(そのようにあなたのお耳に留まるほどの演奏が)、何処よりかここまでは伝はり来む(どのようにして此処まで伝わって来ると言うのです)。あるまじき御ことなり(有り得ませんよ)」　*「さがなし」は＜性質が悪い、意地が悪い、口が悪い＞などと古語辞典にある。

とて、*琴掻きならしたまへる(といって八宮は七弦琴を掻き鳴らしなさいます)、いとあはれに心すごし(とても身に沁みて胸に迫ります)。かたへは、峰の松風のもてはやすなるべし(それは峰の松風の音が聞こえていた所為かも知れません)。いとたどたどしげにおぼめきたまひて(とてもたどたどしそうに迷いなさるものの)、心ばへあり(風情はあります)。手一つばかりにてやめたまひつ(一曲だけでお止めになりました)。　*「琴」は「きん」と読みがある。七弦古琴のことらしい。八宮は古琴の名手だったらしい。どうも八宮の設定は「うつほ物語」の陰が濃い。

[第二段　薫、八の宮の娘たちの後見を承引]

「このわたりに(この家に)、おぼえなくて(意外にも)、折々ほのめく箏の琴の音こそ(時々少し鳴っている箏の琴の音は)、心得たるにや、と聞く折はべれど(分かって弾いているようだと聴く時もありますが)、心とどめてなどもあらで、久しうなりにけりや(熱心に聞くこともなくなって久しくなります)。

心にまかせて(好き勝手に)、おのおの掻きならすべかめるは(各自が掻き鳴らすような演奏は)、川波ばかりや、打ち合はすらむ(川の波音だけが相手をすることになります)。論なう(従って当然)、物の用にすばかりの拍子なども(式典合奏が出来る間取りなどは)、とまらじとなむ、おぼえはべる(身に付いていないものと思えます)」とて(と言って八宮は)、

「掻き鳴らしたまへ(弾いてみなさい)」と、あなたに聞こえたまへど(と奥の部屋の姫君たちに申しなさったが)、

「思ひ寄らざりし独り言を(何気なく弾いた勝手な演奏を)、聞きたまひけむだにあるものを(お聞きになっただけでもお耳苦しいのに)、いとかたはならむ(とても下手ですので)」とひき入りつつ(と引き籠もって)、皆聞きたまはず(誰も宮の御言葉をお聞きになりません)。たびたびそそのかしたまへど(宮は何度か催促なさいましたが)、とかく*聞こえすさびて(姫君はとにかく固辞して)、やみたまひぬめれば(お弾きなさらないので)、いと口惜しうおぼゆ(中将はとても残念に思いました)。　*「聞こえすさぶ」の「すさぶ」は、大辞泉に＜(動詞の連用形について) 勢いが激しくなる。さかんに…する。＞とある語用で、「とかく聞こえすさぶ」は＜何かとさかんに抗弁申す→とにかく固辞する＞みたいなことらしい。

そのついでにも（このことにつけても）、かくあやしう（こうも頑なに）、世づかぬ思ひやりにて過ぐすありさまどもの（世慣れぬ分別で暮らしている姫たちが）、思ひのほかなることなど（思惑と違って育っていることを）、恥づかしう思いたり（八宮は恥ずかしくお思いになりました）。

「*人にだにいかで知らせじと（嫁を探していそうな男にさえ決して知らせまいと）、はぐくみ過ぐせど（ひた隠しにして姫たちを育てて来ましたが）、今日明日とも知らぬ身の残り少なさに（今日明日とも知れぬ自分の余命の残り少なさを思えば）、さすがに、行く末遠き人は（さすがに将来のある姫たちが）、落ちあふれてさすらへむこと、これのみこそ（落ちぶれて流浪することだけが）、げに、世を離れむ際のほだしなりけれ（実に世の離れる際の気懸かりです）」　*「人にだに」は＜世間一般の誰にも＞ではないようだ。文意からして、宮は此処の発言では娘たちの嫁ぎ先に付いて案じているのであり、その意味で言う「人にだに」は＜嫁を探している男にさえ＞になりそうだ。

と、うち語らひたまへば（と八宮がご相談申しなさると）、心苦しう見たてまつりたまふ（薫中将は心苦しく思い申し上げなさいます）。

「わざとの御後見だち（夫として御世話申し上げるという）、はかばかしき筋にははべらずとも（表立った形ではないとしても）、うとうとしからず思しめされむとなむ思うたまふる（親しくお頼り頂けたらと存じます）。しばしもながらへはべらむ命のほどは（少しでも私が長くこの世にありますうちは）、一言も、かくうち出で聞こえさせてむさまを（このように申し上げましたことの一言も）、違へはべるまじくなむ（違えるものではございません）」

など申したまへば（などと薫君が申しなさると）、「いとうれしきこと（大変嬉しいです）」と、思しのたまふ（と八宮は思い仰います）。

［第三段　薫、弁の君の昔語りの続きを聞く］

さて（それから）、暁方の（明け方の）、宮の御行ひしたまふほどに（宮が勤行をなさる時に）、かの老い人召し出でて（薫中将はかの老女を呼び出して）、会ひたまへり（お会いになりました）。

姫君の*御後見にてさぶらはせたまふ（この老女は八宮が姫君の御助言役として仕えさせていらっしゃる）、弁の君とぞいひける（弁の君という人でした）。*年も六十にすこし足らぬほどなれど、みやびかにゆゑあるけはひして、ものなど聞こゆ（年も 60 歳に少し足りないほどだが、都風な華やかさと教養のある物腰で語り申します）。　*「おおんうしろみ」は「さぶらはせたまふ」とあるので、姫君のお手伝いをするという意味で言う＜御世話係＞としての女房ではなく、立場としては乳母に近い＜御教育係＞であり、姫君は母上を亡くしているので、実際には母親代に近い＜御助言者＞なのだろう。通りで、女房にしては御方様然とした貫禄で、薫君もその押し出しに反感を覚えたほどだったようだが、正に実質での女方管理者ではあったようだ。ただ、八宮の情人ではないようなので、恐らくは血縁のある縁者辺りだろう。　*「年も六十にすこし足らぬほど」は、ほぼ予想の範囲内だ。多分、八宮よりも高齢だ。

故権大納言の君の（亡き藤原の君が）、世とともにものを思ひつつ（生前ずっと思い悩んでは）、病づき（病に臥せって）、はかなくなりたまひにしありさまを（遂に帰らぬ人となってしまったというあらましを）、聞こえ出でて、泣くこと限りなし（話し出して泣くこと真に迫ります）。

「げに、よその人の上と聞かむだに、あはれなるべき古事どもを(確かに他人事として聞くのでさえ身に詰まされる不幸な昔話を)、まして、年ごろおぼつかなく、ゆかしう(まして長年気懸かりで知りたく)、いかなりけむことの初めにかと(一体どのような事の始まりだったのかと)、仏にも、このことをさだかに知らせたまへと、念じつる験にや(仏にもこのことをはっきりお知らせ下さるようにと念じてきた甲斐があってか)、かく夢のやうにあはれなる昔語りを(このように夢のような巡り合わせで感慨深い昔話を)、おぼえぬついでに聞きつけつらむ(意外なところで聞くことになったものだ)」と思すに(とお思いになると)、涙とどめがたかりけり(薫君は涙を禁じ得ません)。

「さても(それにしてもよくぞ)、かく、その世の心知りたる人も残りたまへりけるを(このようにその時の事情を知っている人が生き残っていらっしゃったものだ)。めづらかにも恥づかしうもおぼゆることの筋に(尊くも畏れ多くも思える話の向きですが)、なほ、かく言ひ伝ふるたぐひや(他に是を言い伝えるような人は)、またもあらむ(居るのでしょうか)。年ごろ(今まで私は)、かけても聞き及ばざりける(全く聞き知らずに来ましたが)」とのたまへば(と薫君が仰ると)、

「*小侍従と弁と放ちて(小侍従とこの弁以外には)、また知る人はべらじ(他に知る人はいません)。一言にても、また異人にうちまねびはべらず(また、一言すら他言しておりません)。　*「小侍従と弁と放ちて、また知る人はべらじ」は＜余人の知らない秘密だ＞という言い方だが、実は是だけで＜故藤君と入道宮に過ちがあって、薫君がその不義の子だ＞ということを弁は薫君本人に伝えていることになる。小侍従が入道宮の乳母子で、弁が故藤君の乳母子で、弁の母は小侍従の母の実の姉だったのだから、入道宮と故藤君という当事者を除いて、小侍従と弁だけが知る秘密と言えば＜入道宮と故藤君との密通＞を意味してしまう。薫自身もその心算で「なほ、かく言ひ伝ふるたぐひや、またもあらむ」と弁に訊ねたのだ。先日の弁の話で薫にはほぼ見当の付いた筋だが、だからこそ「めづらかにも恥づかしうもおぼゆることの筋に」と言って、薫は弁に前の話の真偽を確認しようとしたのだ。つまり此処の文が、核心を吐露した場面そのものだ。

かくものはかなく、数ならぬ身のほどにはべれど(このように頼りなく取るに足らない身分の私ですが)、*夜昼かの御影に、つきたてまつりてはべりしかば(夜昼とかの故藤原君の御側にお仕え申しておりましたので)、おのづから*もののけしきをも見たてまつりそめしに(自然に事の成り行きを見知り申し出しまして)、*御心よりあまりて思しける時々(故君がお気持ちを抑え切れなく成りなさった時々に)、*ただ二人の中になむ(ただ小侍従と私との間だけで)、たまさかの御消息の通ひもはべりし(偶に御手紙の取次も致しました)。かたはらいたければ(お恥ずかしいことで)、詳しく聞こえさせず(詳しくは申し上げません)。　*「よるひるかのおおんかげに」は弁が藤君の召し人だったことの自己明示のように聞こえる。　*「もののけしき」が＜故藤君と入道宮との密通の経緯＞であることは、既に薫と弁の間では明確に共通認識されているが、またそれだけに恐れ多くて、このように曖昧表現する他に言いようも無いのだろう。　*「みこころ」は相思相愛なら入道宮にも有り得ただろうが、実際には故藤君の一方的な思いだったので、入道宮からの手紙は返事すらなかった。唯一、藤君の臨終間際に小侍従が女三の宮に無理強いして書かせた返事が一回だけあったか。　*「ただ二人の中になむ」は注に＜小侍従とわたしの間で。敬語のないことに注意。『集成』は「あえて核心に迫らず、綺麗ごとにとどめた言い方」と注す。＞とある。確かに「御」が無いことには注意したい。が、『集成』は何を言っているのか。また、その『集成』の注を子引きする意図は何か。「核心」に付いての共通認識は薫と弁の間に於いては、互いに確認済みだ。

今はのとぢめになりたまひて(臨終間際におなりになって)、いささかのたまひ置くことのはべりしを(少し御遺言なさった事がございますが)、かかる身には、置き所なく(私には荷が重く)、いぶせく思うたまへわたりつつ(懸案に思い続けて参りながら)、いかにしてかは聞こしめし伝ふべきと(何としてもあなた様にお伝え申さねばと)、はかばかしからぬ念誦のついでにも(拙い読経上げの際にも)、思うたまへつるを(お祈り申して参りましたが)、仏は世におはしましけり(こうした機会を得まして、仏はこの世にいらっしゃった)、となむ思うたまへ知りぬる(とのように存じられました)。

御覧ぜさすべき物もはべり(御覧に入れたい物もございます)。今は、何かは、焼きも捨てはべり*なむ(今はもう焼き捨ててしまう方が良いとのように)、かく朝夕の消えを知らぬ身の、*うち捨てはべりなば、*落ち散るやうもこそと(このような明日をも知れぬ身でこのような秘文を持て余しては秘密が漏れ出るようなこともあるかと)、いとうしろめたく思うたまふれど(非常に気弱に存じておりましたが)、この宮わたりにも、時々、ほのめかせたまふを(あなた様がこの宮邸に時々御見えになるのを)、待ち出でたてまつりてしは(お待ち申し上げるようになりましてからは)、すこし頼もしく(少し好転の期待が持てて)、かかる折もやと(こうして是をお渡し申せる機会があるかも知れないと)、念じはべりつる力出でまうで来てなむ(念じて来た効験が現れてきたものに思えて)、さらに、これは、*この世のことにもはべらじ(決して是は偶然ではなく、仏のお導きなのでしょう)」　*「なむ」は「なも」の音変化のようだ。「なも」は、完了の助動詞「ぬ」の未然形「な」に保留の係助詞「も」が付いた連語で、対象体を動きの収まった状態で暫時見据えて、別の視点や対象体に話を移す意図で係助詞語用されたもの、かと思う。で、それが時に余韻を示したり、ひとつの可能性の示唆であったり、願望や強調を示したりして、文末語用されたり、文中語用されたりするのだろう。で、此処では文意からして、この文が主文ではなく、主文の「うしろめたく思うたまふれ」の一例として前置句語用されているので、校訂は句点ではなく読点で下文に続けるべき、かと思う。　*「打ち捨つ」は大辞林に＜「捨てる」を強めた言い方。＞と説明があり＜構わないでほうっておく。＞と用例提示がある。　*「落ち散る」は＜落ちて散る＞。「落つ」は＜抜け落ちる→欠ける→情報が漏れる＞と＜落ちぶれる→力が及ばない→管理不全になる＞とが含意されているかの語感。「散る」は＜散乱して収拾が付かない＞。だから「落ち散る」で＜秘密が漏れて噂が広がる＞という意味のようだが、普通なら枯葉の舞い散る風情に重ねそうなもので、山間に葉も散り始める頃、みたいな枕を言い忘れた文にさえ見える。　*「この世のことにもはべらじ」は、故衛門督に託された言伝を薫君に伝えるべきか伝えざるべきかに弁は逡巡していたが、このような巡り合わせが在った事に、伝えるべしとのお許しを仏から受けた、という考え方で弁が薫君に伝える事を自己正当化した言い方、なのだろう。こういう秘匿事の処分を情人女房に任せるとは衛門督が罪深い。ただ、衛門督は基本的に光君に挑ましく、事の露見をどこかで期待していた節が有って、さすがに一方では客観的判断として、その不都合が分かるからこそ押し潰されたわけだが、もし、女三の宮さえその気になってくれれば火中の栗を拾うにやぶさかではなかったように語られていた。露見した際の後始末についても、藤君は表向きの手配を、ギリギリの線で源君に託していた。そして内向きの手配が、この弁に託した秘文らしい。罪深いが、そのように衛門督は生きたのだから、そのように受け止める以外は無い。雑感だが、衛門督(に見立てられる人)は相当に良い男だったのだろう。故藤君は弁も小侍従も召人にして、その召人が、あろうことか、主人の密通を手引きしたのだから。とは言えそれは、親身に女三の宮の幸せを願ったであろう乳母子の小侍従が、女三の宮に嫌味っぽい光君おじさんよりビンビンの衛門督に女冥利を味わはせよう、と思ったみたいな友達感覚で、恐らくはこの弁も小侍従も、また当然にその母姉妹も、今上帝に相当に濃い血筋の王族筋であろうと推測される。だから、朱雀院にもこの八宮にも縁故があったに違いない。その王家筋の二人から見ても藤原君は家柄も教養も申し分無い。が、しかし、それは所

詮、臣下身分の者にとっての価値観であり、女三の宮の世界観は全く違っていたらしい。いや、弁や小侍従に限らず、末摘花の大輔の命婦という召人の例もあったように、王家筋にもいくらでも下世話な人は居たに違いない。そうした人物が「うつほ物語」に生き生きと描かれていたのも、この源氏物語とは少し違う味わいで興味深かったが、思えば、国家体制がただ一人の王を絶対権威に頂く以上、と同時に王自身が絶対権力者として自前の組織立てを賄う事を断念し、有力者に担がれる形で体制護持を図る以上、天皇とその他の王族との差は歴然で、王家の崖はなだらかではなく絶壁だ。そして、女三の宮は周辺の王族ではなく、上皇の内親王であり、今上帝の妹宮という限られた中心人物の一人だった。だからこそ、衛門督は燃えた。形式王女の女二の宮を正妻に迎えながらも、朱雀院の寵児たる実質王女の女三の宮に執心した衛門督の権力志向意識は、どこかで光君に負け続けた藤原殿の無念さに報いる使命感を自分に課していた、かのようでさえある。

と、泣く泣く(と弁の君は泣く泣く)、こまかに(詳しく)、生まれたまひけるほどのことも、よくおぼえつつ聞こゆ(薫君がお生まれになった時のことも良く覚えていてお話し申します)。

[第四段　薫、父柏木の最期を聞く]

「空しうなりたまひし騒ぎに(衛門督がお亡くなりになった藤原家を挙げての悲しみで)、母にはべりし人は(乳母であった私の母は)、やがて病づきて、ほども経ず隠れはべりにしかば(そのまま病になって程無く死んでしまいましたので)、いとど思うたまへしづみ、藤衣たち重ね、悲しきことを思うたまへしほどに(私はいっそう沈み込んで喪服を重ね着して悲しみに暮れておりました時に)、

年ごろ(長年)、*よからぬ人の心をつけたりけるが(身分の低い者で好意を寄せて来ていた男が)、人をはかりごちて(私を騙して)、*西の海の果てまで取りもてまかりにしかば(西の海の果てまで連れ立って下向いたしましたので)、　*「よからぬ人の心をつけたりけるが」は注に＜身分の高くない人でわたしに懸想していた者が、の意。＞とある。従うが、是は弁自身の言葉なので「よからぬ」は少なからず謙遜であり、ごく一般的に考えれば、60 歳近くになれば子供の世話になって隠居暮らしをしていそうな気がするのに、縁者に仕えて食い繋いでいるかの、この人の数奇さは、相手の身分の低さよりも子宝に恵まれなかったことのように見える。　*「西の海の果て」は注に＜西海道、九州の地。『集成』は「「果て」とあるので、薩摩の国（鹿児島県）であろう。国守は、正六位下相当。中国である」と注す。＞とある。この言い方も額面どおりに取って良いのか疑問だが、西方ではあったのだろう。ところで、薫君が現在 22 歳とすれば、この人の西行も 22 年位前のことになりそうで、40 歳に近い頃であり、その時点で子供がいなければ、それ以降に儲ける可能性は非常に低い。余談だが、上に「よからぬ人の心をつけたりける」とあるが、弁は故藤君よりも少し年上のようで、藤君の召人をその 10 年くらい前に小侍従に引き継いで、その時点で結婚した、みたいな可能性も見えて来る。

京のことさへ跡絶えて(あなた様や藤原家ばかりか、都暮らし全体が不案内になって)、その人もかしこにて亡せはべりにし後(亭主もかの任地で亡くなりました後に)、十年あまりにてなむ(十年以上田舎暮らしをしたことになりますが)、*あらぬ世の心地して(其処は自分が住むべき地ではない気がして)、まかり上りたりしを(再上京いたしましたが)、　*「あらぬ世」は＜違和感がある世界＝自分に相応しくない土地＞として田舎暮らしの事を言っている、と読んで置く。語られていないので、間違っているのかも知れないが、私は弁には子供がないように思うので、「十年あまりにてなむ」も＜夫の死後に十年以

上経ってから＞ではなく、夫の死後すぐに＜もう田舎暮らしが十年以上経っていたが＞、其処で子育てをする必要もなかったので、築いた荘園などの地盤などは処分して、未練も無く上京した、と読んで置く。

この宮は(此方の宮様は)、*父方につけて(私が父方の縁故で)、童より参り通ふゆゑはべりしかば(童の時から参り通っていた事がありましたので)、今はかう世に交じらふべきさまにもはべらぬを(今はこのように宮仕え申せる身分でもございませんが)、 *「父方につけて」の可能性としては、弁の君の父は、それこそ大弁で、八宮の母の姉弟で、八宮には姉の内親王がいて、その内親王の童女として、この弁の君が宮の生家に出入りしていた、ようなことがありそうだ。

*冷泉院の女御殿の御方などこそは(冷泉院の女御殿である藤原姫君が故君の妹君であることから)、昔、聞き馴れたてまつりしわたりにて(昔よく話に聞き申し上げていた御方なので)、参り寄るべくはべりしかど(頼って参上すべきところを)、はしたなくおぼえはべりて(混み入った訳有りだけに、きまりが悪い気が致しまして)、えさし出ではべらで(其方には出向き申しませんで)、*深山隠れの朽木になりにてはべるなり(こうして山奥の老木になっております)。 *「冷泉院の女御殿の御方などこそは」とあるが、冷泉院は薫君が部屋住みしている御座所であり、弁が上京してすぐにこの弘徽殿女御を訪ねていれば、六年くらい前には薫君と会っていたのかも知れない。しかし、薫君が山荘を訪れ出してからでも三年経っているらしいので、今の事情背景にしても二年くらい前には、二人が会っていても良さそうな気はする。薫君はこの年で 22 歳と見做されているが、六年前なら 16 歳で二年前なら 20 歳だが、薫君は「十四にて、二月に侍従になりたまふ。秋、右近中将になりて」(匂兵部卿巻二章一段)とあって、基本的な立場は今に変わらないように見えるものの、実際に 16 歳で出生の秘密を知っていたら、疑義を持っていたのとは比べものにならないほどの多大な影響が人格形成に有った筈で、女遊びをする間も無く出家していたかも知れず、二年前でも全てが中途半端なままで、遊びも情緒も学問も政治も未消化な半人前で挫折したかも知れず、人生に於いて非常に重要な多感な時期を過ぎた頃に秘密を知らされる、という 22 歳という設定は何とも絶妙且つ微妙だ。 *「深山隠れの朽木」は注に＜『異本紫明抄』は「形こそ深山隠れの朽木なれ心は花になさばなりなむ」(古今集雑上、八七五、兼芸法師)「春秋にあへど匂ひもなきものは深山隠れの朽木なるらむ」(貫之集)を指摘。＞とある。作者はこの言い回しで、古今集の「心は花になさばなりなむ」を意味ありげに響かせているのかも知れない。が、良く分からない。

小侍従は、*いつか亡せはべりにけむ(小侍従は、私が西行していた頃に、何時の間にか亡くなっておりました)。そのかみの(その当時に)、若盛りと見はべりし人は(若い盛りと見えていた女房仲間は)、数少なくなりはべりにける末の世に(生き残っている者が数少なくなっておりますこの晩年に)、多くの人に後るる命を(多くの人に先立たれた我が身が)、悲しく思ひたまへてこそ(悲しく思えるものの)、さすがに*めぐらひはべれ(それでもこの世に留まっております)」 *「いつか」は＜何時の間にか＞という副詞語用だろう。特別に親しかった従姉妹が＜何時の間にか死んでいた＞というのは、都を離れていた時の事柄としか思えない。が、西行していたとは言え、国守くらいの地位がある家に重要な連絡が届かない、音信不通状態というのは、私には納得し難い。本当に知らなかったのではなく、子細を省いた曖昧表現かと思う。 *「めぐらふ」は大辞泉に＜［動ハ四］《動詞「めぐる」の未然形＋反復継続の助動詞「ふ」》＞と解説があり、語用例示には＜巡回する。めぐり歩き続ける。＞または＜ためらってさまよう。躊躇(ちゅうちょ)する。＞または＜俗世に生きつづける。＞とある。幾分と、未練に逡巡する語感だろうか。

など聞こゆるほどに(などと弁が話している内に)、例の(前回と同じように)、明け果てぬ(夜が明けました)。

「よし(分かった)、さらば(此処までだ)。この昔物語は尽きすべくなむあらぬ(この昔話は尽きそうもない)。また、人聞かぬ心やすき所にて聞こえむ(また、誰もいない安心な場所で話しましょう)。侍従といひし人は、ほのかにおぼゆるは、*五つ、六つばかりなりしほどにや(侍従といった人は、かすかに覚えているのは、五、六歳の時だったか)、にはかに胸を病みて亡せにきとなむ聞く(にわかに胸を病んで亡くなったと聞きます)。　*「いつつむつばかりなりしほどにや」は注に＜薫が五、六歳だったころ、の意。現在、二十二歳。＞とある。「薫が五、六歳だったころ」とは、およそ＜弁が西行して五、六年たった頃＞に等しく、ほぼ十六年前のことになる。入道宮がこの年で 44 歳の筈なので、小侍従が存命なら 40 歳代後半あたりだろうから、十六年前と言えば 30 歳くらいで亡くなったことになりそうだ。若いし、幻巻直後のことだったのだろうか。いくら密通の秘匿に関わる重要人物とはいえ、小侍従の生死は大勢には影響しない一女房の事情に過ぎない。が、どこか大輔の命婦にも似通ったこの人の生々しい生き方は、それ自体の煌めきは勿論だが、更に、この人が関わった事で動いた財貨流通の切替転換を思うと、一時的な事業や式典で動いた大きな財貨移動の投資効果意義とは別の、世の中はつくづく女が如何生きるか、社会が何処まで其を許容できるか、ということで動いている実態を見る思いだし、王朝とは正にこういう人たちが体現していた世界なんだと再認識させられて、感慨深い。

かかる対面なくは、*罪重き身にて過ぎぬべかりけること(このような対面が無ければ、私は罪深いままで終わるところでした)」などのたまふ(などと薫君は仰います)。　*「罪重き身にて過ぎぬべかりける」は注に＜『集成』は「仏教では、父母の恩を特に重んじ、実の父母を知らず、孝養を尽さないのを重い罪とした」と注す。＞とある。確かに、この注が無ければ意味が分からない文だ。密通が罪深いのは、その反秩序性からして分かり易いが、その不義の子が、隠された出生の事情を知らないことまで罪深いというのは、儒教精神で秩序維持を図るという共同体構造認識での一般事情からは外れる事例での孝行に思えて、分かり難い。儒教なら養父母を敬えば良さそうに見えるので、この教義は儒教混同以前の古典仏教に於いて、個人信条として考案された幸福論なのかも知れない。親を敬う姿勢は無条件で美しい、とかね。私は別に儒教信奉者(ということ自体の意味も分からないが)ではないが、ヒトが頭で考えたように世界が動く、なんていうのは、恵まれたヒトの思い上がった幼稚な夢想だと、下世話ながらも思う。

［第五段　薫、形見の手紙を得る］

ささやかにおし巻き合はせたる*反故どもの、黴臭きを*袋に縫ひ入れたる、取り出でてたてまつる(弁は小さく固く巻き合わせた古紙類のカビ臭いものを袋に縫い入れてあるものを取り出して薫中将に差し上げます)。　*「反故」は「ほぐ」と読みがあり＜古紙。不用品。不用。＞などと古語辞典にある。現代語でも「反故にする(ほごにする)」という言い方で＜ゴミにして捨てる。約束を破る、取り消す。＞という言い方は残っていて、「反故」は「ほご」と読むものと思っていたが、古語辞典では「ほぐ」を常用としてあるようだ。「反故」が「ほご」なら、中国の故事に「反故」という言葉があって、それを流用した語あたりにも見えるが、「ほぐ」となると、別の語源に「反故」という漢字を当てたように見えて来る。何れ確かな事は何も分からない。　*「袋に縫ひ入れたる」は、挿絵には明示を旨としてか風呂敷包みのように中将に差し出されているが、いくつかの古い手紙を巻き合わせたものを袋に縫い入れた、とある文字通りに想像すれば、懐笛に紛れるような棒状だったに思われる。

「御前にて失はせたまへ(其方で捨てて下さい)。『われ、なほ生くべくもあらずなりにたり(もはや是までだ)』とのたまはせて(と故君が仰って)、この御文を取り集めて、賜はせたりしかば(この御手紙類を取り集めて私にお託しなさいましたので)、小侍従に、またあひ見はべらむついで

に、さだかに*伝へ参らせむ(小侍従に今度会った時に必ず女宮に手渡し申し上げるように預けようと)、と思うたまへしを(と思っておりましたが)、やがて別れはべりにしも(そのまま会わずじまいになりましたのも)、*私事には(個人的な親しさを思えば)、飽かず悲しうなむ、思うたまふる(今でも悲しく思われまして)」　*「伝へ参らせむ」は注に＜『完訳』は「小侍従を介して女三の宮に。当初、女三の宮に渡すはずだった」と注す。＞とある。「参る」と敬語遣いがあるので＜女三の宮に＞は明示に等しい。ところで、是は二十余年前の事情なワケだが、この「反故ども」が本来は女三の宮に渡すべきものだったとしたら、いくら昔のことになってしまったとしても、入道宮は存命なのだから、上京したら、やはり入道宮に会って其等を渡すのが筋なのではないか。知己の女房仲間も宮付きの中には居そうなので、それこそ小侍従についての昔話を申し上げたいとか何とか故事つけて、入道宮に面会を賜わることは出来た筈だ。いや勿論、小侍従の死によって秘匿に付いては安堵していたであろう入道宮に、今さら会わせる顔は無い、と考える方が普通なので、であれば、如何にも「今は、何かは、焼きも捨てはべりなむ」(三段)という判断こそが妥当だ。それが、召人の情で出来なかった、のだろうか。肌の温もりを実感したからこそ、その人の筆跡が残る文を焼き捨てるに忍びない、というのもあるのかも知れないが、形見など無くても思い出がある、というのも本物っぽい。光君は紫の上の文を、一周忌法要後に全て焼き捨てたが、それも御堂を構えて安穏に暮らせる余裕の成せるワザだったか。ともあれ、手紙は残って薫君の手に渡る、という展開は、「さらに、これは、この世のことにもはべらじ」(三段)と思わなければ、弁にはとても出来得ない仕業だったのだろう。　*「わたくしごとには」は＜小侍従との個人的な誼から思えば＞と、弁が小侍従の死を悼む言い方ではありそうだが、この「には」という断りは微妙だ。従姉妹なのだから、弁が小侍従の死を悼むのは当然ではあるが、弁と小侍従は女宮と藤君との密通について相談し合える互いに唯一の存在だった。弁の手許には藤君の遺品として女宮宛の手紙が残っているが、それを託せる相談相手を失ったことで、手紙の処分に付いての判断が出来なくなってしまった、という責任能力に不都合が生じた事態の言い訳を、個人的な親しさがあった人の死の悲しみが深かったから、という事情説明で言い抜けようとする、弁の言い方だ。人の死を悲しむ事を非難は出来ないので、関係者の責任を不問に付して、物事の本質論はさて置いて、現出した事態を致し方ない事情として認めて、その上での展開を図ることが、生き残った者たちの現実的な対応だ、と広く認識される事象は世間に多くある。つまり、「には」の狙いは、責任を不問に付して欲しい、だ。弁だけに、弁が立つ、みたいな。

と聞こゆ(と弁は申します)。*つれなくて(薫君は何食わぬ顔で)、これは隠いたまひつ(この袋包みを懐に隠し忍ばせなさいます)。　*「つれなし」は注に＜『完訳』は「薫はあえて平静に無表情を装う。「つれなし」は感動すべきことに感動しないこと」と注す。＞とある。「つれなし」は、他の事物に＜列ならない＝動じない＞だから、必ずしも＜素振り＞ではなしに、本当に影響を受けずに＜平然としている＞こともあるかとは思うが、この場合は、絶対に平常ではいられない場面なので、「あえて平静に無表情を装う」という語用なのだろう。

「かやうの古人は(こうした老人は)、問はず語りにや(別の話題のついでに)、あやしきことの例に言ひ出づらむ(この密通話を変わった話の例として言い出しかねない)」と*苦しく思せど(と薫君は事の露顕を心配なさったが)、「かへすがへすも、散らさぬよしを誓ひつる(返す返すも他言していないと弁が誓ったのを)、さもや(それも大変な事だっただろう)」と、また*思ひ乱れたまふ(と一方では心苦しくお思いになります)。　*「苦しく思す」と「思ひ乱る」の語感が掴み難い。文意から当て推量する。

御粥、強飯など参りたまふ(薫君は朝食に炊飯や蒸飯などを召し上がります)。「昨日は、暇日なりしを(昨日は休日だったが)、今日は、内裏の御物忌も明きぬらむ(今日は御所の謹慎日も明ける事になっている)。院の女一の宮、悩みたまふ御とぶらひに(となると、冷泉院の女一の宮の

御病気の御見舞に)、かならず参るべければ(必ず参上しなければならず)、かたがた暇なくはべるを(いろいろと忙しいので)、またこのころ過ぐして(また閑を見て)、山の紅葉散らぬさきに参るべき(山の紅葉が散る前に参上いたします)」よし(といったご挨拶を)、聞こえたまふ(八宮に申し上げなさいます)。

「かく(このようにあなたが)、しばしば立ち寄らせたまふ光に(しばしばお立ち寄り下さる栄誉で)、山の蔭も(山でのほの暗い生活も)、すこしもの明らむる心地してなむ(少し晴れやかになる気がいたします)」

など、よろこび聞こえたまふ(などと八宮も御礼申しなさいます)。

[第六段　薫、父柏木の遺文を読む]

*帰りたまひて(薫君は三条宮邸にお帰りになって)、まづこの袋を見たまへば(直ぐにこの袋を御覧になると)、唐の*浮線綾を縫ひて(唐製の浮紋様織布を縫い合わせた袋で)、「*上」といふ文字を上に書きたり(「上」という文字を上に書いてあります)。細き組して、口の方を結ひたるに(取り出した封書類は、細い組紐で結んである結び目に)、*かの御名の封つきたり(藤原君の御名で封印がしてあります)。開くるも恐ろしうおぼえたまふ(薫君はその封を解いて中の手紙を、開けるのも畏れ多い気がなさいます)。　*「帰りたまひて」は下に「宮の御前に参りたまへれば」とあるので、冷泉院の自室ではなく、三条宮邸の自室の方に帰ったらしい。　*「浮線綾(ふせんりょう)」は<文様を浮き織りにした綾(あや)。>と大辞泉にある。　*「上」は「じゃう」と読みがある。「上(じょう)」は<進物などの包み紙に書く語。「奉る」「差し上げます」の意。>と大辞泉にある。注には<『集成』は「「上」は、奉るの意。小侍従を介して、女三の宮にさし上げるつもりだったので、こう書いてある」と注す。>とある。袋を用意したのは弁であり、その袋に「上」と墨書きしたのも弁だ。　*「かの御名の封つきたり」は注に<『集成』は「かの人（柏木）の御名の封がついている。結び目に、草名（実名を崩し書きにした花押のようなものを書き、封印とする）と注す。>とある。この封印は故藤君自身が記したものらしい。包み紙の有無は不明。

*色々の紙にて(それぞれ色の違う薄様の紙で)、たまさかに通ひける*御文の返りこと(まれに遣された女宮の御返書が)、*五つ、六つぞある(五通の六枚ほどとあります)。　*「色々の紙」は注に<『集成』は「さまざまの色の紙で。鳥の子の薄様を、色々に染めたもので、恋文に用いる」と注す。>とある。*「おおんふみのかへりこと」は注に<女三の宮からの返事。>とある。小侍従からの代返も含まれるのだろうか。居やしかし、「たまさかに通ひける」とあるのだから、やはり女三の宮からの返書か。　*「いつつむつぞある」は意外というか驚きだ。女三の宮が衛門督に返事を出したのは、出産間際で藤君の病状も悪化した時の一回だけだったように私は読んでいたからだ。まさか、その一回の返書が五、六枚に及ぶ長文だったとは思えないので、言い換えとしては<五通六枚>にして置いたが、「いつつむつ」みたいに曖昧に書いてほしくない文に、私には今さらながら思える。もし、何度か返事があったのなら、返事がある事自体が好意の記しなのだし、その内容によっては藤君の唯一の良薬に成り得た筈だが、それでも良薬足りえなかったという、その微妙な文面は是非とも見たいところだ。が、その内容に付いては全く語られない。実に心外だ。が、詮も無い。

さては(その他には)、かの御手にて(藤原の君の御筆跡で)、病は重く限りになりにたるに(病が重く死期が迫ったので)、また*ほのかにも聞こえむこと難くなりぬるを(もう物越しでご挨拶

申し上げることも出来なくなってしまいましたのを)、ゆかしう思ふことは添ひにたり(残念に思うこと頻りですが)、*御容貌も変りておはしますらむが(出家剃髪なさってしまった事が)、*さまざま悲しきことを(御身にとっても若君にとっても案じられるということを)、*陸奥紙五、六枚に(高級紙の五、六枚に)、*つぶつぶと(ぽつりぽつりと)、あやしき鳥の跡のやうに書きて(よろめいた鶏の足跡みたいに書いてあって)、　*「ほのかにも聞こえむこと」は、渋谷訳文に＜短いお便りを差し上げること＞とあり、与謝野訳文に＜忍んでお逢いすること＞とある。次いで「ゆかしう思ふことは添ひにたり」とあることと、現に「陸奥紙五、六枚につぶつぶとあやしき鳥の跡のやうに書きて」あることからして、「短いお便り」でない事は自明で、「ゆかし」い「ほのか」は＜忍び＞ではなく＜垣間見＞なので、この「ほのかにも聞こえむこと」は＜物越しでお話し申す事＞かと思う。　*「御容貌も変りておはしますらむ」は、「かたちかはる」が＜出家剃髪する＞という言い方なので、是はいよいよ藤君末期の、女三の宮が出産し、その後間も無く出家した、その後に書いた文ということなので、正に入道宮に当てた辞世の句が以下に示されていることになる。なかなかに重たい。　*「さまざまに悲しきこと」の中核は若君の将来への危惧なのだろう。衛門督は、正にその一点に掛けて、自分の死を納得したのだろうし、それを今、その若君本人の薫君が目の当たりにする、という、ちょっと作り過ぎの感もあるが、注目場面ではありそうだ。 *「陸奥紙」は「みちのくにがみ」と読みがあり＜陸奥産の檀紙(だんし)。また、檀紙の別名。上質の楮(こうぞ)紙ともいう。＞と大辞林にある。「檀紙」は＜和紙の一。楮(こうぞ)を原料とし、縮緬(ちりめん)状のしわがある上質の和紙。大きさによって大高・中高・小高に分けられ、文書・表具・包装などに用いられる。平安時代には陸奥から良質のものが産出されたので陸奥紙(みちのくがみ)ともいった。さらに古くは、檀(まゆみ)を原料としたので、真弓(まゆみ)紙とも書かれた。＞と大辞泉にある。何処まで行っても定かには分からない。ざっと、高級紙と思って置く。　*「つぶつぶと」は注に＜『集成』は「こまごまと」。『完訳』は「放ち書き。衰弱のために連綿体にならない」「ぽつりぽつりと」と注す。＞とある。『完訳』に従う。

「目の前にこの世を背く君よりも、よそに別るる魂ぞ悲しき」(和歌 45-12)

「この世を背く君にさえ、会えずに別れ逝く悲しさ」(意訳 45-12)

*注に＜『花鳥余情』は「声をだに聞かで別るる魂よりもなき床に寝む君ぞ悲しき」(古今集哀傷、八五八、読人しらず)を指摘。出家しても生き残るあなたより死んでいくわたしのほうが悲しい、と訴える。＞とある。『花鳥余情』の指摘は、当歌との対比参照を示しているようで興味深い。確かに、両歌は共通して「別るる魂(わかるるたま)」で＜死んで行く自分＞を示しているらしい。ただ、この古今集の参照歌はこのままでは歌意が全く分からずに、例によって「古今和歌集の部屋」サイトの当該ページに頼って、やっと理解出来たものではある。即ち、古今集巻十六の 858 番の歌は「男の、人の国にまかれりけるまに、女にはかにやまひをして、いと弱くなりにける時、よみおきて身まかりにける」という詞書があるもので、それは詰まり＜旅先で妻の急病を知りつつも、自分自身も重体で帰ることも出来ずに、詠み置いて死んでしまった男の歌＞ということだから、歌意は＜あなたの声も聞けずに死んで行く私よりも、残されて病状に苦しむあなたの方こそが気懸かりだ＞という泣かせるものだ。尤も、是が本心なら、愛を信じて死んで行ける幸せな人、のようでもあり、その限りでは妻も救われるような気もするが、是だけではそれ以上の事情は分からない。それにしても、この古今集歌に比して、もし衛門督の当歌は「よそに別るる魂ぞ悲しき」が＜本当に死んでしまう自分の方が未練が残る＞と言っているなら、「悲しき」の意味が相当に違う印象だ。確かに、「目の前」を＜この世＞、「よそ」を＜あの世＞と見て、「目の前に」を＜生きながら＞、「よそに」を＜息絶えて＞とは読めるが、そういう解釈で良いのだろうか。この期に及んでそんな恨みがましい事を藤君は言うのだろうか。素直な執着心に見えなくもないが、全ては自分で蒔いた種だ。で、「悲しき」を見直してみると、古今集歌にしても当歌にしても、是は決して＜自分が悲しくて相手が悲しくない＞のではなくて＜自分も相手も悲しい事情＞なのであり、

係助詞「ぞ」は其等の悲しみを比較して＜より一層＞という程度強調をしていると分かる。で、「目の前に」だが、是は文字通り「この世を背く君」を「目の前に」見ている＜君自身(の悲しみ)＞であり、「よそに」は「この世を背く君」を余所にいて＜見る事が出来ない私(の悲しみ)＞を言っていることと知れる。つまり、藤君は最期まで＜君への変わらぬ愛＞を詠っているわけだ。君は悲しんで尼になったが、その姿さえ見る事が出来ずに死んで行く私の悲しさ、とは本当に泣けてくる。薫君はそう読んだと思いたい。

　また、端に(また隅の方に)、

　「めづらしく聞きはべる*二葉のほども(お目出度とお聞きした若芽の将来に)、うしろめたう思うたまふる方はなけれど(心配申し上げはしないが)、　*「二葉」は大辞林に＜二つの子葉。植物が芽を出した時に見られる二枚の葉。双子葉植物は一般に子葉は二枚である。[季]春。＞とあり、また＜人のごく幼い頃。また、物のごく初期。＞とある。「栴檀は双葉より芳し(せんだんはふたばよりかんばし、白檀(びゃくだん)は発芽のころから香気を放つ。大成する人は幼少のときからすぐれているというたとえ。[大辞泉])」は耳に残る。此処では下歌の「岩根の松」を言う枕を兼ねた語用らしい。

　　命あらばそれとも見まし、人知れぬ岩根にとめし松の生ひ末」（和歌 45-13）

　　できる事なら見届けたい、健気な松の行く末を」（意訳 45-13）

*注に＜柏木の詠歌。薫を「岩根の松」に喩える。『完訳』は「「--ば--まし」の反実仮想で、生命尽きる無念さを慨嘆」と注す。源氏も薫を「岩根の松」に喩えた歌を詠んでいる（「柏木」第四章四段）。＞とある。柏木巻の光君の歌は「誰が世にか種は蒔きしと人問はば如何が岩根の松は答へむ」(和歌 36-04)とあった。光君は皮肉たっぷりの戯れ歌に詠んでいる。「岩根の松」は＜岩の僅かな土溜りから芽を出した意外な松＞であり、もの＜言はね＞から「人知れぬ」と洒落語用が利く。衛門督はまさか皮肉を言う立場にはないが、「岩根の松」を語用した詠み方で、深刻さよりは洒落心が立つ。冗句ではなく、お目出度の祝い気分なのだろう。薫君も微笑ましく読んだ事を願う。

　書きさしたるやうに(書き切れなかったように)、いと乱りがはしうて(ひどく乱れた字で)、「小侍従の君に」と上には書きつけたり(「小侍従の君に」と表には書き付けてありました)。

　*紙魚といふ虫の棲み処になりて、古めきたる黴臭さながら(御文類はシミという虫の棲み家になって古めかしくカビ臭いものの)、跡は消えず(墨の跡は消えておらず)、ただ今書きたらむにも違はぬ言の葉どもの(たった今書いたものとも違わないように見える文面の)、*こまごまとさだかなるを見たまふに(詳細で具体的なのを御覧になるに付けて)、「げに、落ち散りたらましよ(是が本当に人目に触れていたら大変だった)」と、うしろめたう、いとほしきことどもなり(と薫君はゾッとして冷や汗が出る思いでした)。　*「紙魚」は「しみ」と読みがあり＜シミ目シミ科の昆虫の総称。体長 10㎜ 前後。体は細長く、尾端に二本の尾角と一本の尾毛がある。体は銀白色の鱗(うろこ)におおわれ、長い触角をもつ。和紙・衣料・穀類などを食害する。しみむし。＞と大辞林にある。どこかで見た事があるのかも知れないが馴染みは無い。　*「こまごまとさだかなる」は上の歌が記された臨終間際の手紙ではなく、猫の夢の話などが書かれたものの事のような気がするが、そして、それこそが核心の記事だろうと思われるが、其等についての具体的な言及は無い。読者には、どうにもならない。

「かかること、世にまたあらむや(こんな事がこの世に他にあるだろうか)」と、心一つにいとどもの思はしさ添ひて(と薫君は内心に困惑が広がって)、内裏へ参らむと思しつるも(参内しようとお思いになるものの)、出で立たれず(お出かけなさる事が出来ず)、宮の御前に参りたまへれば(母宮の御部屋に伺いなさると)、いと何心もなく(全く無心に)、若やかなるさましたまひて(子供のような純真さで)、経読みたまふを(経文をお読みなさるのを)、恥ぢらひて(薫君の目を気にして)、*もて隠したまへり(経巻を引き隠しなさいました)。 *「もて隠したまへり」は注に＜主語は女三の宮。経文を隠した。『集成』は「当時、経文などを読むのは女らしくないこととされていたので、尼ながら恥じられるのであろう」。『完訳』は「わが子から悟りすました風姿と見られるのが、女の身として恥ずかしい。前の「若やかなる--」とともに、生身の女も感取されよう」と注す。＞とある。

「何かは(このように穏やかに暮らしていらっしゃる母君に、今さらどうして)、知りにけりとも(私が実の父親を知ったと)、知られたてまつらむ(お知らせ申し上げられようか)」など(などと薫君は)、心に籠めて、よろづに思ひゐたまへり(この一件を胸に秘めて母君の人生や自分の身の振り方などについて、いろいろと考え込んでいらっしゃったのです)。

(2013 年 3 月 3 日、読了)